

〈書評〉

竹内理矢・山本洋平編著

『深まりゆくアメリカ文学——源流と展開』

(ミネルヴァ書房、2021年)

有馬三冬

本書は、ミネルヴァ書房の「シリーズ・世界の文学をひらく」より刊行された、アメリカ文学の源流から変遷をたどった文学史のガイドブックとなっている。編著者の1人である竹内理矢は、序文において、アメリカという国を「矛盾と葛藤にあふれ、多様な文化が衝突し交錯しながら切り拓かれてきた空間的土壌」(i)であるとし、そのような場で文学はどのように生まれ、発展してきたのだろうかと読者に問いかける。本書はその問いの答えを読者自身が見つけることを促し、手助けとなるように構成されている。具体的には、時代と社会の変遷について概括する第Ⅰ部、重要な文学者と作品を年代順に紹介する第Ⅱ部、そして文学作品を読み解くヒントとなる視点を提供する第Ⅲ部という構成になっており、それぞれの分類に従ったトピックが用意されている。ひとつのトピックに対して見開き2ページの解説を、その時代あるいは作家についての研究者が担当し、総勢61名ものアメリカ文学研究者が参加している点は注目に値する。多様な視点から文学史を語ることによって、アメリカ文学を理解する上で必須の知識を提示しながらも、特定の文学史観を読者に押し付けることがないように配慮されているといえるだろう。

「第Ⅰ部 アメリカ文学のコンテキスト」では、作家たちが作品を生み出した時代と社会について説明される。社会の変化と密接に結びついた文学運動の変

遷を追っていくことによって、アメリカという国が文学を通してどのような問題を可視化してきたのかを把握することができる。読者の能動的な学びを誘う工夫として、各トピックの冒頭に執筆者から読者に対する大きな問いが提示されている。たとえば、第Ⅰ部の最初のトピックである「1. ピューリタン文学・啓蒙主義」では、「神と世界と人間の間で築かれる関係の中で、人間の位置づけはどのように変わっていったのだろうか」(2)と問いかけられる。このトピックは、ピューリタンのニューイングランド移住という歴史的事実、その移住者たちの文学の特徴、さらに彼らの文学の背景となる啓蒙主義という観点から説明される。読者はこの解説の中から宗教の変化や理性の重視といった、執筆者の問いの答えとなり得る内容を汲み取ることが可能であり、あるいはその内容に満足することなく、さらに考察を深める指針とすることもできる。

「第Ⅱ部 アメリカ文学のテキスト」では、アメリカを代表する53名の作家と作品について解説される。基本的には1人の作家に対して1つの作品という厳選した内容となっているが、ハーマン・メルヴィルとウィリアム・フォークナーは2作品ずつ紹介されている。このような扱いは、編者の判断に従って、日本のアメリカ文学研究における両作家の重要性を反映した結果であるといえる。このセクションの特徴は、第Ⅰ部で紹介されたジャンル区分と連動することなく、年代に沿って作家を列挙していることにある。たとえば、第Ⅰ部「3. 超越主義」で言及されるヘンリー・デイヴィッド・ソローは、20世紀初期に成立した概念である「20. ネイチャーライティング」を語る上でも名前の挙がる作家である。あるいは、黒人女性作家であるゾラ・ニール・ハーストンが「14. 黒人文学」だけでなく、より特定の芸術運動である「15. ハーレム・ルネッサンス」においても取り上げられるように、ジャンルと作家は一對一の関係で語ることはできない。作家や文学作品をジャンルごとに分別する行為自体が恣意性と不可分であるため、文学史における作家・作品とジャンルの関係は常に再解釈を必要とする問題であり、作家をどう解釈するかという文学史理解の根本に関わってくる。そのため、時代に沿った文芸運動の紹介と作家の紹介を切り離す本書は、まさにその関係性を読者の解釈に委ねているのである。

個々の作家の固有性に焦点を当てる手立てとして、この第Ⅱ部では作品の一部を原文と訳文で紹介し、執筆者による解釈をつけている。たとえば、宮川雅の執筆する「5. エドガー・アラン・ポー」では「アッシャー家の没落」を取り上げ、ポーがプロットを重視した作家であることを紹介し、実際に「アッシャー家」で描かれる家がプロットの比喩となっていることを指摘する。宮川は語り

手がアッシャー邸を仔細に眺める描写を本文から引用し、英国作家ブルワー＝リットンの長編小説に対するポーの書評の中の表現と類似していることを示しており、ポーの作品がいかにか自己言及的な作品論として機能するかを理解することができる(59)。このように、作品の原文と訳文の掲載が単なる内容紹介に留まることなく、作家の文学的思想、作品における実践例、それに対する研究者の解釈を一続きに展開している点は非常に興味深い特徴である。さらに、執筆者による解釈が示された後に、作品内容に踏み込んだ問いが置かれることによって、本書をきっかけに作品に触れてみる読者には読解のヒントに、すでに読了している読者には再考の契機になるよう工夫されている。

「第Ⅲ部 アメリカ文学への新視点」では、文学作品を解釈するための切り口、さらには文学研究においても重要な視点を提示している。セクションは5つに大別され、「人間の一生」「社会／文化」「動植物」「表象文化」「世界文学」というテーマから、多様なアメリカ文学像が示されている。社会背景と文芸運動の変遷を概観した第Ⅰ部、年代順に作家を紹介した第Ⅱ部と異なり、共通するテーマからアメリカ文学を捉え直す第Ⅲ部は、時代の離れた作家同士の関心の呼応や、アメリカ文学に通底する問題意識を確認することができる。特に、「世界文学」の項目で扱われる「日本文学から見た視点」は、日本人としてアメリカ文学を読み直す多くの読者が当事者となるトピックでもある。アメリカ文学と日本文学の関係について、柴田元幸は明治時代の「学びとる」段階、大正から戦前の「創造的吸収」の段階を経て、戦後の大江健三郎、中上健次、村上春樹のような作家の登場に至ることを指摘し、近現代の日本の文学的発展にはアメリカ文学の存在が不可欠であったことを明らかにする(216)。さらに現代では日本からアメリカへの影響も認められるという柴田の言葉は、現在進行形で深化するアメリカと日本の文学的影響関係が今後も注目すべき主題であることを示している。

以上が本書の要約である。トピックごとに設定される問いや、特定の視点に偏ることのない多彩な執筆者の参加、3つの観点からアメリカ文学を眺望するという構成からは、本書が一貫して読者の能動的な思考を促していることが伺える。アメリカ文学がどのように生まれ、発展してきたのかという序文で提示された問いに対して、読者が自分なりの答えを見つけるための知識やアイデアを本書は提供しているのである。巻末に作品の人物関係図や詳細な文献表が載せられていることも、読者のさらなる学びを助ける編者の細やかな配慮が為されているといえるだろう。もう1人の編著者である山本洋平は、本書の結び

において、「作家は「アメリカ」をどのように描いているかという視点はいまだに古びていない視点」であり、非アメリカ人である我々が「外部」からの視点で問いかえすことには一定の意義がある」(218)と述べ、改めて21世紀の日本でアメリカ文学を学ぶ意味を強調している。このように、アメリカ文学に馴染みのない一般読者から研究者までを読者の射程に捉えながら「アメリカ文学とは何か」を問い直す本書は、文学史の優れたガイドブックであるだけでなく、現代における文学研究の意義とは何かを読者に強く訴えかけているのである。